

カナダ文化の現況



ノースロップ・フライ

(文芸評論家)

絵画や映画、さらには文学にまで強く見られるドキュメンタリー的な関心は、カナダ文化の際立った特徴である。それは遠く初期の探検家や宣教師の伝統、イエズス会の報告書 (Jesuit Relations) やハドソン湾会社の報告書の伝統を継いだものである。特に絵画においてこのような関心が強い。絵画はもともと旧石器時代に洞窟の奥深く始まった芸術であり、それ以来常に、まだ生まれぬ世界に通ずるものを画面上に表わし、闇の中で自然を彩色してきた。絵画は、非人間的世界の人間化を拒む、あるいは人間的なもの一切に同化するのを拒む沈黙の他者に対して、住む人もまばらな土地で、必死にこらえ抗う想像的努力の最前線に位置するといつてよい。

自然に対する魅了感は、一九三〇年頃まで、カナダ絵画の支配的特徴だった。もっと後の時代の、抽象的傾向の強い画家たち、たとえばリオペル (Riopelle) などにあっても、潜在意識においては風景という強固な基盤をもっている。中でもその探検的な側面、開拓者の側面はトム・トンプソン、エミリー・カー、七人グループに明らかであり、今でも目印のつけられた道跡やカヌーのカナダとして広く表現されている。画家はわれわれの目に単に眼前の風景から、遠く森の中の空地へと、あるいは川の曲がりくねりや彼方の丘陵の切れ目へといざなう。強烈な色彩コントラストをもつ表現主義やフォービズムの技法は、人間を意識せず、巨人タイタン達の無慈悲な闘いに没頭する自然界を暗示する。

この時期の文学は、絵画ほど隆盛を見なかった。このような遠視的な視野は、文学においてはレトリックな方向に向かいやすいからである。一世紀前に書かれたカナダの詩は、大半がまだ未熟で植民地風である。この時期の詩人で、後のトンプソンやエミリー・カーのように、内

部に激しい闘いを秘める自然を感じさせてくれる詩人はいない。ただ一人、無名のまま死んだイサベラ・クロフォードという作家には、ある種のきらめきを感じるが、これは例外といつてよい。イギリス系カナダの詩は、E. J. ブラットの出現を待たねばならない。ブラットは、カナダの生活におけるこの遠心的、直線的なリズムの真実の意味を伝えた。彼の詩は、このリズムと深く関わったもの、たとえばイエズス会宣教師の苦難、カナダ太平洋鉄道の建設、攻囲された砦のイメージにも通ずる捕鯨や難破船の物語などをテーマにしている。

文化の動きは、政治や経済の動きと、方向においてもリズムにおいても異なっている。政治的、経済的にいえば、歴史の潮流がより大きな統一へと向かっていることは異論がなからう。ここで言われる統一 (unity) とは、均一性 (uniformity) を含んだ意味である。文化はそれ自体、植物に似た所があつて、成長するには根 (ルーツ) を必要とし、小さな地域、限られた場所を必要とする。アメリカを例にとると、五十州の連合体は文化的一体でなく多様な文化的発展の社会的背景となる政治的、経済的な一体性である。われわれは便宜上、アメリカ文学と言うが、現実の文化状況を語るときは、ミシシッピ派、ニュー・イングランド派、シカゴ派、あるいはパリ在住の国外グループなどについて語るのが普通だ。カナダの場合も同じである。この国が成熟してくるにつれ、ますます多くの地方が想像力の面

の面で活気づき、独自の文化的性格を築いてきた。

この事實は、とりわけフランス系カナダの作家に大きな利点を与えた。フランス系カナダの詩人や小説家は、自分が、いわば包囲された言語を鮮明化する作業に貢献していることをよく知っている。

このような状況における自分の社会的機能、作家であることの重要性について、彼らは何ら疑問を抱く必要がない。彼らの競争者といえ、遠くフランスに在るだけであるし、しかも彼らが生きてい

る社会的背景はフランスとは全く違う。イギリス系カナダの作家は、このような利点を持たなかった。反対に一世紀の間、相も変わらぬアイデンティティの危機に悩まされ続けてきた。第二次世界大戦後まもなく、フランス系カナダはいわゆる

「静かな革命」に入り、自分達が自己自身に属すると同時に、現代世界にも属するのだという自覚に到達した。これによって、それまでフランス系カナダの文化生活を狭く限定していた孤立的な特徴を大かた払拭したのである。一九六〇年以後、イギリス系カナダの文化が突然ドラマチックに沸き立ったが、これは一つにはフランス系の自己規定の動きに刺激されたためである。その時から、とてつもない文化的爆発が始まった。それは文学

と絵画の分野に、とりわけ激しかった。そして、しばしば文化ナショナリズムと呼ばれる全般的ムーブが作り出されたのである。

だが文化ナショナリズムという言い方